

資料

史談会二十周年特別企画

四国霊場巡拝旅行を前に

会員 清田 義雄

(一) 母の大師信仰

大師信仰に厚かった佐伯本町の鍼灸師、佐藤一哉氏が佐伯四国を聞き、お大師講をつくつたりして、佐伯も昔はなかなかに熱心な信者が多かった。

私の母もその信者仲間であつたが、全然文字を知らなため、お経が読めなかつた。口うつしだけで繰り返して覚えることがむづかしいので、お大師さまが教えて下さつたという、「いろは四十八文字」を一生懸命覚える努力をしてきた。そして、経本を借りてきては、私にそれを平仮名に書き直させていた。

夜も寝る前に必ず仏壇に向つて、おつとめをしていて、母の静かな姿は、子供心に強い印象を残してくれている。日々の貧しい生活の苦しみを、こうして大師へおすがりするおつとめで、気持ち静めて眠りについていた。

貧しい人達、めづれな人達を救うため、「現世に理想の社会を築き、入すべてがそのまま仏になつて、幸せが得られる」という真言の教義を体得するために難行苦行をされて、「南無大師遍照金剛」となれば、現世安樂・後生安樂へお導き下さるものと、真剣に信じて

いたようだった。理窟で得度入境地に達すること、燕氏にはむづかしいことだ。

母は生前一度お四国詣りをして来たといふ、口ぐせのようによつていた。生活に余裕がなかつたので、四十日も五十日もという日程をつくり出すことは、むづかしいことだった。それにもまして、十人の子供を育てあげた肉体は、六十歳の疲れと共に、いつも不具合を訴えていた。それでもこの願いを捨てがたく、四国の土を踏めば、お大師様のご利益で、結願の大窪寺まで辿りつけると信じていたが、遂にその機会に恵まれずにお山を遊んでしまつた。

(二) 聖蹟順拝の心

尊く聖なる入のみおとを慕つて、聖蹟霊場を巡拝するならおしほ、弱い人間として世界の各地に残つてい。しかし聖蹟といわれる所は、難所が多く、途中の盗賊・追はぎの徒の危険にさらされている地域が多かつたようである。

弘法大師によつて開かれた(講説はあるが)という四国遍路の道も、国々に開所(悪いことをした人、邪心をもつている人は、お大師さんのおとがめを受けて、ここから先はすすめなくなる)といわれる)や、難所(一に焼山、二にお鶴、三に太龍と、阿波路だけでも焼山寺・鶴林寺・太龍寺の厳しさ)とうたつてい。体は丈夫でも、心のひずみでどうしても越せぬ人もあつたといふ。衆生済度の発願で、大師修業の聖蹟だけに、難波する道の多いことであつたであらう。修業僧といわれる人達の巡拝は、八束寺その他のように、きらにお山をすするといふ、梯子を登り、くさりを伝ひ、

危険な新産に身をゆだねる道も歩いてはいる様である。
現代通路行は、車で走り、險をさけ、「へんろ道」の道しるべを横目に観光道路が走っている。

私共もこの道を通って、八十八ヶ寺の中十ヶ寺を、壯者四十日の行程を三泊四日下きりつめて、さらに飯深く觀光し、古建築や彫刻・美術としての価値高い觀賞も、また庶民信仰としての信仰碑にも、更に美しい自然が生まれた文字碑、源平合戦古戦場のような史跡の現地探訪、浦島太郎や桃太郎のふるさと、現代産業の目ざましい進展とひびき、構造技術の驚異など、限りない広がりで見出すが、まともを充分しぼりたい。

(三) 現代通路考

只一つでも現世を踏んで、とらえられたというものがあれば、満足すべきではなからうか。

人それぞれ個性で、欲の張り方はみな違えばずである。会員の一人一人でつかまえた収穫、その集められた報告がまとまるなら、史談会の躍進にこの旅行が大きな成果をおげるだろう。

(四) 巡拝したい私の心

私日、母の心で廻りたいと思うが、霊場に対する考え方は、大師信仰の昔とは随分違ってきている。

寺自体、善通寺・海岸寺の誕生地争い、三十番同番の善楽寺・安楽寺の本家争いなど、寺そのものの神秘性の薄れを考えると、仏の望も金次第の羨ましさが頭にうかんでくる。

四国通路は、俗世からの逃避行であるとか、母親から

「死ぬまで戻るべないぞ」と、派一びいで送り出されたお寺山まがいの通路も多かつたという。
霊場巡拝は知ることはなく、感教き心に体することである。歴史の記憶でなく、体でうけとめる強さがある。厭しい自然・靈感・帰依する心で、祖先の生き方を知る喜びを先とし、批判よりも素直な觸れ方を体験して来たい。

参拝箇所

八十八ヶ所霊場中 十ヶ寺(別表)
神社 金刀比羅宮
栗林公園 屋島(史跡)
徳島の十郎兵衛屋敷 室戸崎
高知城 桂浜

西参拝霊場十ヶ寺

今度旅行のねらい
四国四果の完全一周
徳島展を歩く(その東海岸、室戸)
大師信仰の実態にふれる

霊場名	本尊	開基	弘法大師	備考
第四十番 (後醍醐天皇) 平常山 觀自在寺 (真言宗)	薬師如来 眼仏 西條花如来 十西觀音	延宝六年甲午 和馬藤正 伊達宗利 本堂建立	大同二年甲戌 天皇の勅額 あり、本尊 眼仏を彫り、 行基菩薩 勅額の山号 あり	平城天皇の遺髪 と伝わたと いう 御輪塔あり

霊場名	本尊	開基	弘法大師	備考
五十番 (松山市) 熊野山 石寺寺 (真言宗) (前法皇御 安養寺)	薬師如来 天平元年 行基による 朝眼	神龜五年伊 予大末越智 王純 聖武天皇勅 命による開 創 衛門三郎一乃物路により 石寺寺と改む	弘仁四年 留錫	二王門(鎌倉時代) 一園空 本堂・三會塔・鐘樓 講堂・新築市母天 堂(鎌倉・室町・國 重文)
六十三番 (西条市) 密教山 吉祥寺 (真言宗)	毘沙門天像 (聖徳太子) 股仙 吉祥天 善哉菩薩	弘仁代・元親 の兵火により 金山焼失 本尊自ら難 ぞとせし獲 去善寺と なる	弘法大師の 開創 上記諸仏を 彫るといふ伝 承	本堂前・成就石 庫裡前・八角堂 (通称寄進) 六福神とまつる 本尊と併せて七 福神
七十五番 (善通寺) 五岳山 善通寺 誕生院 (真言宗) (慈本山)	薬師如来 大師刻焼 失・運長依 自筆 一目大師 雅子大師 西親木像	大同一弘仁 父の唐園寄 捨て大師 開創 所成三尊一 所成三尊一 謙徳香川の 長大はるか リ 後復興	弘法大師 誕生地 父の名をとり 善通寺と 称す	唐の青龍寺伽藍に 模す 土南大門・五重塔 抽の大水(時から) 金堂 御影堂(大佛堂) 中門・三王門 地下戒壇めぐり 源氏の利生塔
八十四番 (高松市鷹島) 南面山 屋島寺 (真言宗)	十一面 千手観音 (空海彫) (重文)	天平勝宝五 唐僧鑑真 開創 (律宗の祖 のつす)	弘仁六年 空海大師 近之に大師の 修業した 獅子蔵の 聖地	鑑真山上の仏像終 典と伝ふ 空海・天神と稱 請(山の保護とす) 四天門・水堂(重文) (室町初期) 大師堂・三休堂 鐘樓・梵鐘(重文) 雪の庭(白・猿蓑石)

霊場名	本尊	開基	弘法大師	備考
一番 (鳴尾市板東) 坐和山 霊山寺 (真言宗)	釈迦如来 (伝大師作)	天平年間 行基開基 長曾我部 兵火に焼か 再建 明治天皇 多宝菩薩 其後再建	弘仁年間 大師留錫 修法本尊 彫り 第一番の札 所とす	多宝塔(志水) 上智如来 鐘樓・水堂・善徳 大師堂 (通称用品あり) 怒心の道場 第二歩の寺
二十三番 (海部郡日和佐) 医王山 薬王寺 (真言宗)	薬師如来 (伝大師作) 前向後向 押さの 前像	行基の南基 文治四罹災 本尊自ら 遊難すと 再建 再建 再建 再建 再建 再建	弘仁六年 大師四王才 の厄防けに 自ら薬師 仏に刻ま といふ	山門・康程・鐘樓 本堂 石段・厄落し坂 女33男11厄落 本堂後の石段坂 遷層厄除坂 彌陀塔・密教教義 菩提心の道場 有止せり寺
二十四番 (室戸岬町) 室戸山 最御崎寺 (真言宗)	虚空蔵菩薩 (大師刻)	足利時代の 土佐の安国寺 巨刹すべ 最上人 復興 本堂再建	大同二年 湯朝の大師 再訪して 建立す	本堂・大師堂 鐘樓・山門 板じり岩の伝説 昔は男女禁制寺 であった
八十六番 (志度町) 補陀洛山 志度寺 (真言宗)	十一面観音 一木作り	推古三三年 藤子の尼が 霊水で観音 持統八年 藤原房前 行基と共に 志度寺と改む	弘仁年間 空海によ り札所と なる 基の塔をつくる 弘重の塔(昭五) 自性院(平賀源成) 行基と共に建て 志度寺と改む	唐高祖妃(鎌足)最 王と尊神に奉われと いかえした海女房前 と生む 基の塔をつくる 弘重の塔(昭五) 自性院(平賀源成) 行基と共に建て 志度寺と改む

靈場名	三十一番 (善經菩薩山) 五台山 竹林寺 (真言宗)
本尊	文殊菩薩 (云行著作)
開基	神龜元年 聖武帝・唐 五台山 文殊菩薩を 拝すと夢 その行基に 命じこころ その靈地と す
弘法大師	弘仁年間 大師 猶如 ^レ 一か の行をおま い、礼所とす
備考	三層の玉門 文殊堂(本堂) 空所文明年間 因の重文、 頂「南國土佐……」 花念碑 牧野博士植物園 記念館等

弘法大師畧年譜

備 空海とはどんなお方か

四國八十八ヶ所靈場の開創や整備の恩人である弘法大師について、年表をつけて畧記し、その偉大なご事蹟を仰ぎたい。

四國靈場が、番外寺を入れると百ヶ所に近い中に、臨濟・曹洞・天台・法相の各宗に属する七ヶ所の外は、弘法大師を稱祖とする真言宗である。

大師のご誕生

空龜五年六月十五日 誕生

番外 屏風浦 海岸寺説

空海著の「三教指帰」(さんこうしきき)にいう、屏風ヶ浦は、母王依の産室のあった所で、そこで真魚(まおろし)大師の幼名)を生んだという説
七十五番 善通寺 説

父佐伯善通(よしむち)卿の居宅のあった所、現在の御影堂の所で生まれたいとの説
文化十三年 嵯峨御所より還降下り、一日

産室、一日父の居宅として誕生地とさる。

(屏風浦は善通寺より五キロほどはなれている)

大師のご両親

父 讚岐國造 佐伯善通卿(佐伯直田公)
母 知識階級の阿刀氏の出身(阿刀大足の子)
玉依御前

佐元

空龜五年(七七四)。六月十五日屏風浦に誕生

十二年(七八〇)。捨身乞食で心の鍛錬 獻齡(七才)

延暦四年(七八五)。讃岐國学(現國分寺)に学ぶ(十二才)

七年(七八八)。阿止大足と上京、長岡の都で学ぶ(十四才)

十年(七九二)。大智明経堂入学、直講味酒淨成に五經

(十八才) 博士岡田牛養に方氏春秋を学ぶ(十八才)

十一年(七九三)。この道は宮僚としては間違いない出世の道であったが、仏道探究の願いを立て出家を志す。無空と改め、大空を去る。

。阿波 太龍の嶺(現土倉ヶ所太龍寺)に登り、或いは空戸の岬(現千四番最御時寺)を修業地とする(三教指帰)

深い雪の中に寒さとたたかい、粗衣をまとい、夏の暑さと漸食苦行など辛苦に耐えしのぶことで、自らを鍛える生活とされる。

。二十才頃まで四國の山地を巡り歩き、大自然の中で積む苦行練行が、深い宗教的体験となった。

特に太龍寺の巖山(舍身山)は、大師が百日の苦行に倦りが開けず、深い谷に臨んだ巖上から、身をなげいて倦りを開

延隆十年(七九三) かんとした所と伝えられる。無空の名を如空に改め、和泉梅尾寺で得度して教海と呼び、更に後空海と改める。

三十五年(八〇四) 後 都へ上り、南都六宗の教学を学ぶ。大和久米寺の東塔の下で「大日経」の写を発見、大師の求めたものを得てこの研学に精励、入唐の望みを益々高める。勅許を得て、最澄・橘逸勢等と共に入唐、長安の西明寺へ。

半年後、密教の第一人者青蓮寺の志果阿闍梨を訪い、胎藏界・金剛界・伝法阿闍梨の各灌頂を伝授されて、密教の奥儀秘事を授けつゝ、准頂のとき、マンダラ中央の大日如来の上二度も投花が落ちて、「通照金剛」の名をつけられる。

大同元年(八〇六) 帰朝

二年(八〇七)

真言宗開創の勅許を得る。

四年(八〇九)

嵯峨天皇に召され、洛西高雄山寺に入り、名声いよいよ高まる。

弘仁四年(八三三)

善通寺落成(大同二年から六年後)

六年(八三五)

四国八十八ヶ所を大師が問くという(伝説)

七年(八三六)

高野山を賜あり、金剛峯寺を問く。

十二年(八四二)

讃岐伊予度律郡神野に満濃池を築く。

十四年(八四三)

東寺を賜あり、国家祈禱の根本道場として、教王護国寺を創る。

天長二年(八三三)

太覚寺を淳和天皇の勅願により再興す。

(五十二才)

天長五年(八三三) 京都藤原三守の旧宅をもらいうけ、私学館芸種智院と興し、六位以下の子弟に仏教と儒教を教授した我園最初の普通教育機関

承和二年(八三三) 三月廿一日 高野山にて入寂 (六十二才)

八十六年後の 延喜二十一年(九二二) 醍醐天皇代 弘法大師の謚名

史談会二十周年特別企画

四国霊場巡拝・名勝古跡めぐり

連絡と情報

◇日程の一部変更

第二日 第一に満濃池 平安朝初期、空海上人が作った津液用満池、弘法大師は國利民福をはかって、橋をかけた。潮池を掘った。たけなな。その事業の一端、意義ある見学を加える。

第三日 三番札所雪深寺参拝は旅程の都合でおとす。これでご参拝札所は十ヶ寺となる。

◇参加定員の決定

バスの座席・ホテルの部屋の都合から五〇名に制限。現在度付、会員五八名、会員外五名、外多数の希望者がある。調整の上、五〇名以上の場合は来春の第二回に加わっていただく。

◇第二次 四国霊場巡拝一周バス旅行 参加者募集中

期日 来春 三月十八日出発 十七・二十日とあがり 二十一日帰着
乗物 マイクロバス 又は大型観光バス(人数による)
日程 コース・費用 今秋十一月のりと同じ
申込み なるべく十月中に 第一次(十一月分)よりおわるものが
十二・三、それ以降は 新穂・桐野浦・下堅田・志高山・赤生・本庄と
各地より参加者がお見え。電話で早目な事務局へ